

或女の日記

この頃やや珍らしい草稿が私の手に入った、——細長い十七枚の柔い紙を、絹の紐で綴ちて、表紙に麗しい文字が書いてあつた。それは或婦人が自分の結婚生活の歴史を自分で書いた日記のやうなものであつた。書いた本人が亡くなつてから、その人の持つてゐた針箱のうちに見出されたのであつた。

この草稿を貸した友人は私に、公けにしてもよいと思ふだけ、如何程でも翻譯してもよいと云ふ許しを與へた。私はこの無類の好機會を利用して、下層社會の婦人の思想感情、喜びと悲しみを、——丁度この婦人が、苟も外國人がそのつつましい哀れな日記を讀まうなどは夢にも思はないで、思ひ切つてあからさまに書き残した通り、その儘英語に直す事にした。

しかし彼女の優しい靈を尊敬してたとへこの人が生きてゐてこの文を讀む事があつても、少しも迷惑にならないやうに、その草稿を用ふるやうにした。神聖だと思つたので省いた處もある、又たとへ註釋を加へても西洋の讀者に分りさうにない習慣や地方的信仰に關する些細な事で省いたものも少しはある。それから勿論姓名は皆變へてある。その他の點ではできるだけ原文通りにして、——直譯では充分に分らない場合の外は一句も變へた所はない。

この日記に述べてあり又暗示してある事實の外に、私は本人の履歴などは知る所殆んどない。この婦人は最下層社會の人であつた。彼女の話で見ると、三十近くまで未婚であつたらしい。妹の方が數年前から結婚してゐた。日記ではこの世間並でない事の理由は分らない。日記と一緒にあつた小さい寫眞で見ると、この人は綺麗とは云へなかつたことが分る。しかし顔附の優しいつつましげな一種人好きのする風に見える。夫はどこか大きな事務所の小使であつた、主に夜勤であつて月給は十圓であつた。家計の助けに女は煙草屋の紙卷煙草を作つた。

日記を見ると、彼女は數年學校に行つた事があるに相違ない事が分る。假名は中々巧みに書けるが漢字は澤山は知らなかつたので、この日記は小學生の少女が書いたもののやうである。しかし誤りのない慣れた風に書いてある。東京語（市民の通用語）で、癖のある言葉が多いが、下卑な所は少しもない。

日常の生活さへ困難であるのに讀んで貰へさうにもない日記を、御苦勞にも書くなどとは如何なる理由だと、無理ならぬ疑を起す人もあらう。このやうな問を發する人には、昔から日本の教では悲しい時に歌や詩を作るのは、一番よい藥になつてゐる事を知らせたい。又下層社會に於ても今日でもなほ凡て喜びや悲しみの場合には歌を作ると云ふ事實を知らせたい。この日記の後半

は淋しい病氣の時に書かれたのである。淋しさの餘り氣も狂ひさうな時に、主に心を靜める爲めに書いたのであらうと思はれる。死ぬ少し前には元氣も沮喪してゐた、それでこの日記の終りの部分は弱い便りない肉體に對して、精神が最後の奮戦をした事を示して居るやうである。

草稿の表には『昔話』と題してあつた。昔とは數百年前の事實、或一個人の過ぎ去つた昔の事を云ふのである。勿論この場合ではあとの方の意味に使つてある。

昔話

明治二十八年九月二十五日の夕方、向ひの家の人が來て問うた。――

『御宅の御總領の事です、お片づきになつてもいゝのでせう』

そこで返事はかうであつた。

『出したい事は出したいのですが、何分支度ができてゐませんので』

向ひの人は云つた。――

『しかし、さきでは支度などはいらなないと云ふのですから、私の云ふ人におやりになつて下さいませんか。中々堅氣な人だと云ふ評判です。年は三十八歳です。御總領は二十六位だと思ひますから、先方へ云ひ出して見たのですが……』

『い、え——二十九ですよ』と答へた。

『あ、……それなら先方へ今一應話して見なければなりません。先方に話してから御相談に参ります』

さう云つて向ひの人は出て行つた。

翌晩、向ひの人が又来て——今度は岡田氏の細君（うちの知人）と一緒に——それから云つた。

『先方は満足です——そこであなたも御承諾ならこの縁談は整ひます』

父は答へて、

『二人とも註一「七赤金」だから合性です——大丈夫差支ありません』

仲人は尋ねた、

『それでは見合は明日致すことに取計つて如何です』

父は答へた。

『全く何事も縁ですから……それでは明晩の今頃岡田さんの宅で會ふ事にして下さい』

こんな風に、約束が雙方でできた。

向ひの人は翌晩岡田の宅へ私を連れて行かうと云つたが、私は何分一度踏み出した以上のつびきならぬ事ですから、母と二人だけで参りたいと云つた。

母とその家へ行つた時「こちらへ」と云つて迎へられた。それから始めてお互に挨拶した。しかし何だかきまりが悪くて顔を見る事ができなかつた。

それから岡田氏は並木氏（夫の姓）に向つて『あなたは内で相談する人もないのだし、善は急げと云ふから、早速よいと思つたら、きめなすつては如何ですか』

その返事はかうであつた、

『私の方は充分満足ですが、先方は如何考へて居なさるか分りません』

『御覽の通りで引取つてもよいと思召すやうなら……』^{註二}と私は云つた。

仲人は云つた。

『それなら婚禮の日はいつがよいでせう』

『明日はうちに居りますが、十月一日の方がいゝでせう』と並木氏は答へた。

しかし岡田氏は直ちに云つた、

『並木氏の留守の間に家の心配もあるから、明日の方がよくはないでせうか——どうでせう』

初めはそれは餘り早過ぎると思はれたが、私は直ぐに翌日は「大安日」であることを思ひ出した。それで私は承諾して、それから歸宅した。

父に話したら、不機嫌であつた。餘り早過ぎる。せめて三四日位の猶豫がなければならぬいと云つた。それから方角が宜しくない、外によくない事もあると云つた。

私は云つた、——

『でも、もう約束してしまひました、もう日を變へて下さいと頼む事はできません。實際留守の間に泥棒でも入つたら氣の毒です。方角が悪いと云つて、よしそれで死にましても私不服はございません、夫の家で死ぬのですもの……』それから又云つた。『それで明日は忙しくて後藤（妹婿）へ行く暇がありますまいから、只今行つて参ります』

後藤へ行つた、しかし會つたら、私は云ひに來た事をその儘云ふのがこはくなつた。私はただかう云つてほのめかした。

『私明日よそへ行かねばなりませんの』

後藤は直ぐに尋ねた、――

『御嫁さんにですね』

もちもぢしながらやうやく云つた、――

『え、』

後藤は『どんな人ですか』と尋ねた。

私は答へた、――

『私の考へがきまる程、その人をよく見る事ができるやうな私なら、なにもわざわざ母と一緒に持つて貰ふわけがないぢやないの』

彼は云つた、『それぢや、姉さんは一體何のために見合に行つたんです。……しかし』大分愉快さうに云ひ足した、『おめでたう』

私は云つた、『とにかく、明日の事なんです』
それから私は家へ歸つた。

さて約束の日になつて見ると（九月二十八日）どうしてよいか分らぬ程澤山用意する事があつた。それに幾日も雨降りであつたので道が大層悪く、そのために一層困つた。ただ幸に、その日は雨が降らなかつた。私は何かこまごましたものを買はねばならなかつたが、母に何でも頼むと云ふわけにも行かなかつた、（頼みたかつたのだが）何分年の故で、母の足は餘程弱くなつてゐたから。そこで私は随分早起きをして獨りで出かけて、できるだけの事を一所懸命にしたが、それでもまだ充分準備のできないうちに午後二時になつた。

それから髪を結びに髮結の處に、又風呂にも行かねばならず——それがまたみんな暇が取れた。それから着物を着換へに歸つたが、並木氏からは何の使ひも來てゐなかつた。私はそれが少し心配になつた。丁度、夕飯が濟んだ時、使が來た。一同に一々暇乞を云うて居る暇さへなかつた、それからもう一生歸らない覺悟で出かけた、そして岡田氏の家に母と歩いて行つた。

そこで又母とも分れねばならなかつた。岡田氏の家内は私の世話をして、一緒に船町の並木氏の家へ行つた。

三々九度の盃事も無事にすみ、又御開きの時も思ひの外早く來たので御客は皆歸つた。
『あとには二人差向ひとなり、胸打ち騒ぎ、その恥かしさ筆紙につくし難し』譯註一
全く私の感じた事は、始めて兩親のうちを出て花嫁となり、知らぬ家の娘となつた事の覺えのある人にだけ分るであらう。

あとで食事の時、私は大層きまりが悪かつた。……

二三日後に夫の先妻（なくなつた）の父が私を訪ねて來て、云つた、——
『並木氏は本當によい人です——堅い着實な人です。しかし小さい事にもやかましく小言を云ひ勝ちな人だから、氣をつけて、氣に入るやうになさるがよい』

私は初めから夫の様子を注意して見てゐて、實際中々嚴しい几帳面な人だと思つた。それで萬事氣に逆らはぬやうにしようと決心した。

十月五日が里歸りの日であつた、それで始めて二人で一緒に出かけた。途中後藤を訪れた。後藤の家を出てから、急に天氣が悪くなつて雨が降つて來た。そこで雨傘を借りて相合傘にさした。こんなにして歩いて居るのを以前の近處の人にも見られはしないかと氣が氣でなかつたが、幸に無事に兩親の家に着いて挨拶をした。幸に雨はまもなく止んだ。

同月九日初めて一緒に芝居へ行つた。赤坂演伎座に行つて山口一座の芝居を見た。

十一月八日淺草寺に参り、それから御西様にも参詣した。

その年の十二月に夫と自分の春着をこしらへた。その時始めてかういふ仕事の面白い事が分つて大層嬉しいと思つた。

二十五日東大久保の天神様に参り、その御庭を散歩した。

二十九年の一月十一日に岡田を訪れた。

十二日に後藤へ二人で行つて面白かつた。

二月九日『妹背山』を見に二人で三崎座に行つた。途中思ひがけなく後藤氏にあひ、それから一緒に行つた。しかし歸りには折悪しく雨降り出し道がひどくぬかつた。

同月二十二日、天野で二人の寫眞を取つた。

三月二十五日『春木座』に行き『鶯墳』の芝居を見た。

この月のうちに一緒に一同（兩親、親戚、友達）打連れて花見に行く約束をしたが、中々都合よく行かなかつた。

四月十日、午前九時、二人で散歩に出た。初めて九段招魂社へ参詣し、それから上野公園まで行き、そこから浅草へ行つて観音様に参詣し、また門跡様にも参詣した。それから浅草奥山の方へ廻るつもりで、先づ御飯をと云ふので——そこで或料理屋へ入つた。食事をして居るうち、戸外に大喧嘩があるのかと思はれる程の大騒ぎやら叫び聲やらが聞えた。その騒ぎは見せもの小屋に火事が起つたからであつた。見て居るうちにも火が早く擴がつて、その町の見せもの小屋は大抵焼けた。——私共はすぐ料理屋を出て浅草公園をあちこち、見物しながら歩いた。

(つぎに原稿にはこの婦人が作つた小さい歌がある)

今戸の渡し註五にて

あひ見た事のなき人に

不思議に三めぐり稻荷

かくも夫婦になるのみか

初めの思ひに引きかへて

いつしか心も隅田川

つがひ離れぬ都鳥

人も羨めば我身もまた

咲きみだれたる土手の花よりも

花にも増したその人と

白鬚やしろになるまでも

添ひとげたしと祈り念じ

……それから、うちの方へと吾妻橋を渡つた。蒸汽で曾我兄弟の御寺の開帳に行つた。そして私共や兄弟姉妹がいつも仲よく楽しくくらするやうにと祈つた。その晩歸つたのが七時過。

——同月二十五日、私共は『録物の寄席』に行つた。

*

五月二日つつじを見に二人で大久保に行つた。

同月六日私共は招魂社へ花火を見に出かけた。

——これまで二人の間に何の風波もなかつた。そして私は二人で出かけた見物に行つたりする時にきまりの悪い事もなくなつた。今ではお互に氣に入るやうにとばかりつとめて居るやうだ。そして、私は二人はどんな事があつても離れる事はないと信じて居る。……私共の關係はいつもこんなに幸であるやうにと祈る。

六月十八日は須賀神社の祭禮なので父の家に招かれた。髮結が間に合ふやうに来てくれたので大變困つた。しかし妹のおとりさんと父の家に出かけた。やがてお幸さん（かたづいて居る妹）も参り——にぎやかであつた。晩になつて後藤氏（お幸の夫）が見え、最後に私が一心に待つてゐた夫が見えた。それから大へん嬉しかつた事が一つあつた。夫と私が一緒に出かける時、よく私がこしらへた新しい春着を着ませうと云ひ出しても、夫はその度毎に古いので澤山だと云つて聞き入れなかつた。それでも今度は——父の招待だから着なければならぬと思つて——新しい方を着てくれた。一同折よくこんなに集つたので皆が一層機嫌よくなつた。そして仕舞に別れる時にただ夏の夜の短かさをかこつた。

つぎのはその晩私共の作つた歌である、——

二夫婦そろうて祝ふ氏神の

祭りも今日にはにぎはひにけり

並木（夫）

氏神の祭りめでたし二夫婦

同じく並木

いくとせもにぎやかなりし氏神の

祭りにそろふ今日の嬉しさ

妻

祭りとして一家集る樂しみは

げに氏神の恵みなりけり

妻

二夫婦そろうて今日の親しみも

神の恵みぞめでたかりけり

妻

氏神の恵みも深き夫婦づれ

妻

祭りとして對に仕立てし伊豫がすり

今日樂しみに着ると思へば

妻

思ひきやはからずそろふ二夫婦

何にたとへん今日の吉日

後藤

祭りとして始めてそろふ二夫婦

後のかへりぞ今は悲しき

お幸

故郷の祭りにそろふ二夫婦

語らふ間さへ夏の短夜

お幸

七月五日に播摩太夫のかかつた金澤亭に『三十三間堂』をきいた。

八月一日夫の先妻の一周忌につき浅草寺に参詣、それから吾妻橋のそばの鰻屋で中飯。そこに居るうちに丁度、正午の時に地震があつた。河に近いので家が大へんゆれて、随分恐ろしかった。

——先に櫻の時分に來た時大火事を見たのを思ひ出してこの地震は心配になつた。今度は雷でも落ちはせぬかと思つた。註六

二時頃に鰻屋を出て浅草公園に入つた。そこから鐵道馬車で神田に行き、それから神田の涼しい處で暫く休んだ。途中父を訪ねて歸つたのは九時過。

同月十五日八幡神社の祭禮、後藤と妹と、後藤の妹と宅へ來てくれた。私は一同揃つて宮参りをしたいと思つてゐたが、この朝夫が少しお酒を飲み過ぎたので、そこで仕方なく夫を置いて出かけた。参詣してから後藤の宅へ行き、しばらくしてから歸つた。

九月お彼岸の中日にひとり寺参りをした。

十月十一日おたかさん静岡より來らる。私は翌日芝居へ案内したかつたが、おたかさんは翌朝早く東京を立たねばならぬ事になつた。それでも夫と私は翌晩柳盛座に赴いて『松岡美談貞忠鑑』を見物した。

六月二十二日父から頼まれた着物を仕立てはじめたが、加減が悪くて充分でしなかつた。しかし新年（明治三十年）の元日に仕上げる事ができた。

……今度は子供が生れるので大へん嬉しい。それから私は両親が初孫をもつてどんなにか得意になつて喜びなさるかと思つた。

五月十日母と鹽釜様へ参詣し、それから泉岳寺に参詣に出かけた。そこで四十七士のお墓註七や色々の寶物を拜觀した。新宿まで汽車で歸つた。鹽町三丁目で母と別れ、うちについたのは六時。

六月八日午後四時男子出生。母子共この上もなく健やかに見えた。子供は夫によく似てゐた。大きい黒い眼をしてゐた。……しかし大へん小さい兒であつた。八月に生るべき筈の處六月に生れたのであつた。……同日午後七時藥を飲まず時になつて、ランプの光で見ると大きな眼を開いて、その邊を見廻してゐた。その晩一晩私の母の懷に眠つてゐた。八月子だから餘程暖かくしてやらねばならないと聞いたから夜晝懷に入れて置く事にした。

翌日——六月九日——午後六時半子供は突然死んだ。……

——『嬉しき間は僅かにて、又悲しみと變ず、生るるものはみな必ず死す』とあるは實にこの世のよい戒である。

僅か一日母と呼ばれ、ただ死ぬのを見るために子供を生んだのであつた。——本當に生れて二日位で死ぬのなら生れない方がよかつたのにと思ふ。

十二月から六月まで私は随分病氣であつた。それからお産をしていくらかよくなつて喜んでゐた。今度の慶事につき方々からお祝ひを受けたが、それに子供が死んでしまつた。——本當に私は悲しさにたへない。

六月十日大久保、泉福寺と云ふ御寺で葬式を行ひ、それから小さいお墓をたてた。

その時の歌――

思ひきや身にさへかへぬ撫子に

別れし袖の露のたもとを

さみだれやしめりがちなる袖のたもとを

それから間もなく人が卒塔婆を逆さに立てて置けば、こんな不幸に再びあはないと聞かせてくれた。そんな事をするのは餘程かはいさうに思はれて、色々迷つたが、八月九日遂に卒塔婆を逆さに立てた。……

九月九日赤坂の芝居に二人で行つた。

十月十八日日本郷春木座へ獨りで行き大久保彦左衛門の芝居を見た。^{註九}そこで下足札をうつかりなくし、皆出てしまふまで残らねばならなかつた。それから漸く草履を見つけて歸る事ができた。しかし眞暗な夜で途中で大へん淋しかつた。

三十一年正月の節句に堀の伯母と友人内海さんの奥さんと話をして居る最中、急に胸が痛

み出したので驚いて簞笥の上にある水天宮様のお守りを取らうとする途端に氣が遠くなつて倒れた。親切に介抱されて直ぐ正氣づいたが、そののち長い間病氣になつた。

四月十日が東京遷都三十年祭なので、父の家に集る事にした。重之助〔多分親戚〕と一緒に先に行つて、夫を待つてゐた。夫はその日朝のうち、一寸役所へ行く筈であつた。八時半頃に夫は父の家に来て、皆と一緒になつた。それから私共三人だけ一緒に出かけて市中の景況を見た。麴町から永田町に行き櫻田門を通つて日比谷見附に出て、それから銀座通から眼鏡橋を通つて上野に出た。そこで色々見物ののち、又眼鏡橋に出た。その時餘程疲れてゐたので私は歸らうと云ひ出したら、夫もやはり疲れてゐたので賛成したが、重之助は『こんなよい時に大名行列を見落してはつまらないから銀座へ行かう』と云つてきかない。そこで重之助と別れて小さい天ぶら屋に入つて天ぶらを喰べた。それから連のよい事には折よくその家から大名行列を見ることができた。その晩歸つたのは六時半。

四月の半ばから妹おとりの事で随分心配した〔その事は書いてない〕

*

明治三十一年八月三十一日二番目の子供が殆んど何の苦痛もなく出生——女であつた。初と名づけた。

出産の時に世話を受けた人々を七夜に招いた。

——母はそれから二日程みてくれたが、妹のお幸の胸がひどく痛むので、せん方なく歸られる事になつた。幸に夫がこの頃きまつた休暇を得たので、できるだけの世話をしてくれた——洗濯や何かの事まで。しかし自分のそばに女がゐないので私は時々大へん困つた。……

夫の休暇がなくなつてから母は時々夫の留守に来てくれた。二十一日もこんなにして過ぎたが母子共健康であつた。

——娘が生れてから百日になるまで時々呼吸が苦しさうに見えるのでたえず心配した。しかしそれも漸くなくなり段々強くなるやうであつた。

それでも一つ不幸な事があつた。それは不具の事で、初は生れた時から片方の手の拇指が二本あつた。手術を受けに病院へ連れて行く氣には長い間なれなかつた。しかしつい近處の婦人が新宿の大へん上手な外科醫の事を話してくれたのでたうとう行く事にきめた。手術の間、夫が膝に子供をのせてゐた。私は手術を見る事はとてできなかった。どうなる事かと思つて、心配と恐ろしさで胸一杯になつてつぎの室で待つてゐた。しかし濟んでから子供は何事もなかつたやうな顔をしてゐた。暫くして、いつものやうに乳を飲んだ。それで案じた

よりも好都合に事が濟んだ。

うちに歸つて前の通り續いて乳を飲んだ。そして小さいからだに何事もなかつたやうに見えた。しかし大へんに幼いからあんな手術などを受けて、何か病氣の種でも作りはしなかつたかと心配した。用心のために三週間程毎日病院に通つた。しかし悪い様子は少しも見えなかつた。

三十二年三月三日の初節句に父と後藤と兩方から内裏雛、その外御祝ひの品々、箆筒鏡臺針箱を貰つた。私共もこの時に子供のために茶臺、御膳、その外の小さい物を色々買つてやつた。後藤と重之助はその日見えて、にぎやかであつた。

四月三日穴八幡〔早稻田〕に參詣して子供の息災延命を祈つた。……
四月二十九日は病氣のやうで私は醫者に診て貰ふことにした。

醫者はその朝来てくれる約束をしながら、来てくれない、一日中待つてゐたが駄目であつた。翌日も待つてゐたが来てくれない、夕方になつて初は段々悪くなり、胸のところが大へん苦しさうであつたので、翌朝早く醫者へつれて行かうと決心した。一晚中心配でならなかつたが、朝になつて少しよくなつたらしい。そこでおんぶして獨りで出かけて赤坂の或醫者へ行つた。診て下さいと頼むと未だ患者を診る時刻でないから待つて居るやうにと云はれた。

待つて居るうちに子供が前より一層ひどく泣き出して乳にも吸附かず、ただ歩いて見たり休んで見たりして、すかすより外に仕方がなく、大へん困つた。やうやくの事で醫者が見えて子供を診て貰つたが、その時子供の泣き聲が段々弱くなつて、唇が段々蒼くなつた事に氣が附いた。そこでそれを見て黙つて居られないので『如何な様子でせうか』と尋ねると『晩までもたない』と云はれた。『何かお藥をやつて下さいませんか』と尋ねると『飲めたらよいがね』と云はれた。

私はすぐ歸つて夫や父のうちへ云つてやりたいと思つたが餘りひどく驚いたので——一時に力がなくなつた。幸に或親切な老婦人が、傘や何かを持つて車に乗る世話をして下さつたので、人力車で歸宅する事ができた。それから人を頼んで夫と父に傳へた。三田の奥さんが世話に来て下さつた。そのお蔭で子供を助けるためにできるだけの事をした。……それでも未だ夫が歸つて來なかつた。しかし心配や世話した事は皆無駄になつた。

それで三十二年五月二日子供は十萬億土の歸らぬ旅へ赴いた。

子供の父と母は未だ生きて居る——よい醫者にかけて診て貰ふ事を怠つてそれで子供を死なしてしまつたやうな父と母とが。さう思へば本當に悲しさにたへない。時々私共はそれを云つて身を責めて居るが歸らぬ事は仕方がない。

しかし子供の死んだ翌日醫者が私共に『あの病氣は初めからどんなに手を盡しても、とて

も一週間以上生きてはゐなかつたのです。十か十一にもなつてゐたら手術をして或は助かつたかも知れないが、今は餘り幼少だから手術などは思ひもよらないことです』と云つた。それから子供は腎臓炎で死んだのだと聞かせてくれた。

こんなにして、私共の持つてゐた望みや、これまで色々心配して世話した事や、九ヶ月間段々生長するのを見て喜んだ事は皆一切無駄になつた。

しかし私共二人はこの子供との縁が前世からうすかつたのに相違ないと思ひあきらめて、漸くいくらか悲しみを慰める事ができた。

退屈な時の淋しさに、私は義太夫本の宮城野しのぶの話の風に歌を作つて、心のうちを云つて見た。

これこのうちへ縁づきしは

思ひ廻せば五とせ前

今度まうけし女の子

可愛ものとして育つるか

我身のなりは打ち忘れて

育てし事も情けない

かうした事とは露知らず
この初は無事に育つるか
首尾よう成人したならば
やがてむこを取り

樂しませようどうしてと
物見遊山をたしなんで

我兒大事と

夫の事も初の事も

戀しなつかし思ふのを

樂しみくらしした效もなく

親子になりしは嬉しいが

先きだつ事を見る母の

心を推してたもいと

——手を取りかはす夫婦の歎き
なげきを立ち聞くも
貰ひ泣きして表口

障子もぬる、ばかりなり

初の死んだ時分は、葬式に關する規則はよくなつて、大久保で火葬する事も許される事になつた。そこで並木に願つて、もし面倒な規則さへなかつたら並木一族の手つぎの御寺へ遺骸をもつて行く事にして貰つた。そこで葬式は門淨寺で行つた。この寺は眞宗本願寺の淺草派である。遺骨はそこへ納めた。

——妹の幸は初になくなつた時、大分ひどい風邪で寝てゐた。しかし知らせが着いたあとで間もなく來てくれた。それから又二三日して大分よくなつたから、最早心配して下さるなと云ひに來た。

——私は又私で、何處へも行く事がいやになつて丁度一月、家を出なかつた。しかしいつまでも出ないで居る事も、禮儀上できないから、たうとう出かけた。そこで父の家と妹の家へ義理上の訪問をした。

*

——大分病氣になつたので、母に來て世話をして貰ふつもりで、お幸も又、病氣になつたのでよし（ここに初めて出て居る妹）と母と始終ついてゐた。それで父の宅からは世話し貰へなかつた。ただ近處の女の人々が暇のある時、全くの親切から來て世話をしてくれる

ばかりで、誰も世話してくれるものもない。漸く堀氏に頼んで、世話してくれるよいお婆さんを一人雇うて貰つた。この人の介抱でよくなりかけて、八月の初め頃には私も餘程よくなつた。……

九月四日妹お幸は肺病でなくなつた。

——萬一の事があつたら、妹のよしが幸の代りになると始めに約束してあつた。後藤氏も全く獨りで居るのも不自由故、同月十一日に結婚式があり、それから一通りの祝ひをした。

同月三十日に岡田氏が急になくなつた。

こんな事が重なつて色々費用がかかつたので大分困つた。

——幸が死んでよしが餘り早く行つた事を始めて聞いた時、私は大へん氣もちが悪るかつた。しかし、私はその心もちを隠して以前の通り後藤にはなしをしてゐた。

十一月に後藤はひとりで札幌に行つた。

明治三十三年二月二日後藤氏は東京にかへり、同月十四日よしを連れて再び北海道に出かけた。

*

二月二十日午前六時三番目の子供（男兒）出生、母子共に無事。

——女のつもりでゐた處生れたのが男であつた。それで夫が勤めから歸つて来て男子である事を見て大へん驚いて喜んだ。

——しかし子供は十分乳を飲む事ができないので哺乳器で育てねばならなかつた。

生れて七日目に少し髪を剃つてやつた。それから晩に七夜の祝を今度はうちだけでした。

——少し前から夫は風を引いてゐたが、つぎの朝、咳がひどく出て出勤ができなかつたので終日うちにあた。

その朝早く子供はいつもの通りに乳を飲んだ。しかし午前十時頃胸がひどく痛むやうで、それから變にうめき出したから醫者を呼びにやつた。折悪しく迎へにやつた醫者は市外に出てゐて晩までは歸られないとの事、それで直ぐに外の醫者を迎ひにやる方がよいと考へて迎ひにやつた。その醫者は夕方來ると云つた。しかし午後二時頃子供の病氣は急に悪くなつて二月二十七日、三時少し前に子供は僅かこの世に八日ゐてあへなくなつた。……

——今度又こんな不幸があつて、夫に嫌はれるやうになるまででなくとも、こんなに代る代る子供に別れるのは、前世に何か犯した罪の罰に相違ないと獨りで思つた。さう思へば袖のかわく間もなく涙の雨も止まず、私のためにはこの世で空の晴れる事がないやうに思はれた。

私のために繰りかへしこんな不幸にあふので、夫の心も悪い方に變るまいかと益々心配になつて來た。私の心にある心配のために、夫の心のうちも思はれて心配した。

それでも夫はただ『天命致し方これなく』と繰りかへしてばかりゐた。

——子供はどこか近い御寺に葬られた方が、参りに行くのによからうと思つたので、大久保泉福寺と云ふ御寺で葬式をし、遺骨はそこへ納めた。

樂しみもさめてはかなし春の夢

……（日附なし）私が色々心配した故か、子供が死んでから二七日間、顔と手足が少しふくれた。——しかし餘り大した事でもなく、直ぐに直つた……今ではもう三七日も過ぎた。……

ここで哀れな母の日記が終つて居る。子供の死後二十一日に關する終りの記事から最後の數行は、三月十三四日に書かれたものだらうと思はれる。彼女は同月二十八日に死んだ。

日本の生活状態に充分通じない人は、この簡単な歴史を全く理解することができないだらう。しかしここに書かれた生活の實際の状態を想像する事は困難ではない。——この夫婦は二間（六

疊一間三疊一間)の小さい家に住んで居る。夫は一ヶ月漸く十圓をまうける。妻は裁縫、洗濯、料理(勿論戸外で)をする。大寒の時にも火にあたる事がない。自分は、この夫婦は家賃を入れずに、一日平均二十七八錢でくらしてゐたに相違ないと考へる。娯樂と云つても實は餘程安上りであつた。八錢も出せば芝居見物にも義太夫ききにも行かれた。それから見物をするのは徒歩であつた。それでもこんな娯樂はこの人々には贅澤であつた。必要な着物を買ふとか、結婚、出産、死亡の時に親戚に贈物をせねばならないとか云ふ場合の費用は、獻身的經濟によつて始めて出せるのである。實際東京の數千の貧民はこれより一層貧しくくらして居る(一ヶ月十圓よりも、もつと少い収入でくらして居る)——しかし、それでもいつも小綺麗に小ざつぱりとして愉快にくらして居る。こんな境遇にあつて子供を生んで育てて行く事は、ただ餘程強壯な婦人にして始めて容易にできる。こんな境遇は田舎のもつと苦しいが、しかし、もつと強壯な農民の境遇よりはるかに危険である。それで多數のうち弱いものは倒れて死ぬ事は想像する事ができる。

この日記を読む人々はこんなに慎み深くやさしい婦人が、かくの如く不意に、その性質氣分に、ついでには毫も知らない全くの他人の妻にならうと熱心になつた事を不思議に思ふであらう。實際日本に於ける大多數の結婚はここに書いてある通りの非小説的な方法で、又仲人の力で整へられるのである。しかしこの人の境遇は例外と云ふべき程氣の毒である。その理由は哀れに簡單である。善良なる女子は皆結婚する事にきまつて居る、或時期を過ぎて未だ結婚しないのは本人の恥

辱であり又人の指弾を受ける。疑ひもなくこんな擯斥を受くる事がいやさに、この日記の記者は自分の當然の運命を果たす眞先の機會を捉へたのであつた。この人はすでに二十九歳であつた。こんな機會は再び出て來なかつたかも知れない。

自分にとつてはこの哀れな奮闘と失敗の懺悔記の眞の意味は、なにも稀有な告白があると云ふ點でなく、ただ日本人には青空や日光のやうにありふれた何物かを示してゐる點にある。柔順なる事と義務を立派に仕遂げる事によつて、愛情を得ようとの健氣なるこの婦人の決心、どんな僅かの親切に對しても有する感謝の念、小兒のやうな信仰心、この上もなき無私の念、この世の苦難は皆、前の世に犯した過ちの報いであると云ふ佛教の解釋、絶望の眞中にも歌を作らうとする努力——凡てこれ等の事は如何にも感動すべき事、如何に感動しても及ばない事である。しかし之は例外のものとは思はれない。ここにあらはれて居る特質は、一例に過ぎない。——下層社會の婦人の徳性を代表した一例に過ぎない。恐らくこの婦人と同じく下層社會に生れて、自分の喜びや苦しみを、これ程單純でしかも哀れな日記で表はす事ができるやうな日本婦人は澤山はあるまい。しかし眞面目の信仰の昔し昔しの時代からこの人と同じく人生は義務であるとの心得をうけつぎ又この人と同じく無私の愛情を注ぐ力をうけついでゐる婦人は、日本には幾百万人あるかも知れない。

註一 七赤金。父はたしかに「三世相」のやうな占ひの本か、或は専門の占師に相談

したのである。

註二 「御承知になつて居る通り、私はお金も着物もない貧乏な女ですが、それでも貰つてやると云ふ御思召なら、私も喜んで参ります」と云ふ意味。

註三 吉日、不吉日は日本の曆によれば、このやうな名で表してある。

● 先勝、——午前よし、午後わるし。

⊕ 友引、——午前よし、午後は始めと終りよく、中わるし。

● 先負、——午前わるし、午後よし。

● 佛滅、——全部不吉。

○ 大安、——全部よし。

● 赤口、——正午だけよく、あとは全く不吉。

註四 日本の婚禮では、不吉な意味のこもつた言葉、或は間接になりとも不幸をほめかすやうな言葉を避けることになつて居る。

「すむ」「終る」「歸る」などその他澤山の言葉は婚禮では禁句である。それで一同お暇をすることを「お開き」と云ふ言葉に普通改める。

註五 今戸の渡し船のことを云つて居るやうで、實はこの婚禮を媒妁した仲人のこと。
と。……

註六 「地震、火事、雷、三十日、飢饉、病のない國へ行きたい」と云ふ佛教から出

た諺による。

註七 鹽釜神社は婦人が安産をいのるために參詣する神社。……

註八 卒塔婆は經文を書いて墓の前にたてる細長い木の板である。卒塔婆の詳細なる記事は著者の『異國情趣と懷古のことども』のうち「死者文學」と題する一篇を見られよ。著者はこゝにある珍らしい迷信の事を敍説、解釋する事はできない、しかし著者の『佛の畠の落穂』に記した不思議な習慣と多分同種類のものであらう。

註九 この芝居見物を單に遊興と見るのは公平ではあるまい、むしろ苦痛を忘れるため、それから多分夫の命令で行つたものであらう。……

註十 節句と名のつく祭日は一年に五度ある。この五節句は人日（一月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕（七月七日）、及び重陽（九月九日）である。

譯註一 著者はこの文句を譯して、更に原文はこの通りと、ローマ字で殘して置いた。これに依つて原文の體裁も想像できる。（田部隆次譯）

A Woman's Diary... (Kotto.)